

関東大震災と文豪

——成蹊大学図書館の展示から——

児 玉 千 尋

I. 目的

方丈記が書かれてから800年にあたる節目の年2012年に、成蹊大学図書館では「災害文学としての『方丈記』と東日本大震災」という展示を行った。震災に関する資料を集める過程で、関東大震災に遭遇した著名な文豪たちが残した文学作品が数多くあり、まだまとまった形では研究をなされていないことが分かった。一つ一つの作品を読むだけでも充分興味深い、ある一時期に関してこれだけ様々な作家が、これだけのヴォリュームのものを残しているということは、当時を知る上でも非常に貴重な資料といえる。これは、個々の作家研究、作家仲間の関係性、あるいは歴史資料としてなど様々な方面から分析できそうである。一体、歴史上のある一日に関して、これほど様々な人の証言がある日というのは、他にどれほどあるだろうか。本稿では、この展示に関した本学図書館司書の視点から、震災に係する文献リストと、文豪たちの素顔や関係性がうかがえるいくつかのエピソードを紹介する。

ただし、このリストは図書館での展示という目的上、成蹊大学図書館に所蔵されている本のみを取り上げている。調査の過程では、他にも興味深い資料を見出したが、図書館に所蔵がない本に関しては現物をあたっておらず、リストから割愛している。そういう点で、本調査は網羅的ではない。また、展示の際には古今の震災に関する文献を集めたが、本稿ではその一部、関東大震災を中心に紹介する。なお、関東大震災はマグニチュード7.9、1923年（大正12年）9月1日11時58分に発生し、首都圏に甚大な被害をもたらした。

II. 先行研究

これまで関東大震災と文学者に関する研究は、李^(注1)の島崎藤村、前田^(注2)の中村武羅夫、十重田^(注3)の横光利一と川端康成といったように、ある特定の文学者の研究が中心であり、包括的な研究は限られていた。ちょうど本稿の準備をしている

注1 李志炯(2002)「関東大震災と〈震災小説〉—大震災後の報道環境と島崎藤村『子に送る手紙』を中心に」『文学研究論集』第20号 pp.93-110

注2 前田潤(1999)「中村武羅夫「群盲」の亀裂—「関東大震災」直下の連載小説」『立教大学日本文学』第82巻 pp.75-86

際に『文豪たちの関東大震災体験記』^(注4)が発売されたが、この本に掲載されている作家は32名と今回のリストのごく一部であった。この他に包括的な研究としては、稲垣^(注5)、小田切^(注6)、浦西^(注7)、植田^(注8)のものが挙げられる。しかし、植田の論文に震災特集を組んだ当時の雑誌の文献リストが簡単に掲載されている程度で、これまで関東大震災文学の全体像が明らかにされることはなかった。

Ⅲ. 調査方法

私の学生時代にはこれほどインターネットが発達していなかったため、文献を探すことは非常に困難であった。現在、どのように調べることが正攻法なのか分らないが、今回用いた文献調査方法を紹介する。

当初、先行研究の参考文献から探していたが、当時の多くの雑誌が関東大震災特集号を組むなど、多くの作家が色々なところに何度も震災に関する著述を残していることが分かってきた。先行研究の数も少ないため、直接、個々の作家の全集などから震災関連作品を探す必要があった。しかし、文学全集の個々の掲載作品については、図書館の検索システムのデータや出版社のホームページなどには載っていないことが多い。書架に行きそれぞれの全集の索引の巻から関係のありそうな著作を探すか、日外アソシエーツなどの総覧から探し出すのも時間がかかる。

そこでネットを探したところ、「研究余録—全集目次総覧」というサイトを発見した。(http://kenkyuyoroku.blog84.fc2.com/) 個人が運営している、作家別に全集の目次を掲載しているサイトで、数百人分の全集の目次が集められている。このサイト自体は、個人運営のもので情報の信頼度は低いが、このサイトから得た情報により、さらに図書館にある現物を確認した。

関東大震災は、当初は「大正大震災」と呼ばれ、著作のタイトルの中にも、「大震災」「大震」「大震災火災」「地震」「天災」など様々な形で現れるため、PCの検索機能を使って「震」や「災」の文字を含む作品を取り上げた。全集は年代順に作品を配列していることが多いので、前後のタイトルなどからも判断して、震災に関連のありそうな作品は現物を確認した。

注3 十重田裕一 (2012)「被災した作家の体験と創作—新感覚派の関東大震災」『早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの“距離”』pp.241-251

注4 石井正己 (2013) 小学館

注5 稲垣達郎 (1964)「関東大震災火災と文壇」『国文学—解釈と教材』10月号 pp.42-47

注6 小田切進 (1967)「関東大震災火災と文学」『国文学—解釈と教材』9月号 pp.66-70

注7 浦西和彦 (1989)「関東大震災と文学」『国文学—解釈と教材』3月号 pp.94-100

注8 植田満文 (1992)「関東大震災と文学者—地震ショックと罹災体験の記録」『武蔵野女子大学紀要』27巻 pp.81-90

IV. 震災時の文豪たち

文献リストを作る上で印象に残ったいくつかの著作を紹介していく。同じエピソードについて複数の人物が書き残しており、それぞれの視点から微妙に描かれ方が異なり、その著者の立場や関係性を浮き彫りにしている点が大変興味深かった。

1. 芥川龍之介とその周辺

近藤富枝^(注9)によれば、芥川龍之介は大正3年に田端に居を構え、関東大震災当時もそこで暮らしていた。芥川にはカリスマ的な魅力があったようで、付近には彼を慕って室生犀星、萩原朔太郎、久保田万太郎など文士が集まっていた。

(1) 芥川龍之介の予言

久米正雄は「地異人変記」^(注10)で芥川が行った予言についてしきりに感心している。

芥川龍之介が、何かの拍子にほんとの真顔で、「今年はきつと何か大きな天変地異があるぜ。或る古老もさう云つてゐたさうだし、僕自身何かさう云ふやうな気がしてならない。」と、幾度も繰り返し予言してゐたが、其の時私たちまで、「ほんとうにさう云ふ気はするね。何だか余り世の中が間違つてゐるから。」など、すっかり冗談に云つてゐたのだつたが、…私は予言と云ふものゝ、かくまで文句なしに当つたのを、他の如何なる予言に於いても見た事はない。

しかし、当の芥川本人は「大震雑記」^(注11)で次のように白状している。

僕は爾來人の顔さへ見れば、「天変地異が起りさうだ」と云つた。しかし誰も真に受けない。久米正雄の如きはにやにやしなから、「菊池寛が弱気になるつてね」などと大いに僕を嘲弄したものである。…大地震はそれから八日目に起つた。

「あの時は義理にも反対したかつたけれど、実際君の予言は中つたね。」

久米も今は僕の予言に大いに敬意を表してゐる。さう云ふことならば白状しても好い。一実は僕も僕の予言を余り信用しなかつたのだよ。

(2) 芥川龍之介と妻文

仲間たちの芥川崇拜は大したもの、佐藤春夫は「芥川龍之介のこと一問抜けなとこのない人」^(注12)でしきりと地震時の芥川の態度に感服している。地震にも悠然とし、さっと食料を調達したスマートな芥川が描かれている。

注9 近藤富江 (1983) 『田端文士村』中央公論新社

注10 久米正雄 (1930) 「地異人変記」『久米正雄全集第13巻』平凡社 p.230

注11 芥川龍之介 (1978) 「大震雑記」『芥川龍之介全集第6巻』岩波書店 p.173

注12 佐藤春夫 (1969) 「芥川龍之介のこと一問抜けなとこのない人」『佐藤春夫全集第11巻』講談社 p.328

室生から聞いたのだが、地震の最中に、芥川君は室生のところへ悠然と見舞に
来たさうだ。それからその翌日は自身で子守車をひつぱり出してそれへーばい
のじやがいのやらさつまいもやらを買ひ込んで来たさうだ。

「こいつは甘いからたとひ砂糖がなくなつても食へる」

と説明をしたさうである。…何しろ間抜けなところ一拙の少しもない人だ。

芥川自身は地震について「大震日録」^(注13)に次のように書いている。

九月一日。

午ごろ茶の間にパンと牛乳を喫しり、將に茶を飲まんとすれば、忽ち大震の
来るあり。母と共に屋外に出づ。妻は二階に眠れる多加志を救ひに去り、…妻
と伯母と多加志を抱いて屋外に出づれば、更に又父と比呂志とのあらざるを知
る。婢しづを、再び屋内に入り、倉皇比呂志を抱いて出づ。

しかし、一方芥川の妻の文は次のように述べている^(注14)。

その時、ぐらりと地震です。

主人は、「地震だ、早く外へ出るように」と言いながら、門の方へ走り出し
ました。そして門の所で待機しているようです。

私は、二階に二男多加志が寝ていたので、とっさに二階へかけ上がりまして、
…子供をまず安全な所へ連れ出さねばと、一生懸命でやっと外へ逃れ出しました。

部屋で長男を抱えて椅子にかけていた舅は、私と同じように長男をだいて外
へ逃れ出てきました。私はその時主人に、
「赤ん坊が寝ているのを知っていて、自分ばかり先に逃げるとは、どんな考え
ですか」

とひどく怒りました。

すると主人は、

「人間最後になると自分のことしか考えないものだ」

と、ひっそりと言いました。

芥川は佐藤春夫が感心したほど、悠然としていたわけではなさそうだ。文の文章
では、この後佐藤も紹介した野菜の買出しに続くのだが、この文脈では、スマート
な行動というよりは、子供を置き去りにして一人で逃げ出した父親の苦心のポイント
挽回に見えてしまう。妻にかかると、皆の憧れの文豪もかたなしである。

2. 非常事態に際して持ち出したもの—カンカン帽（井伏鱒二）、観音像（泉鏡花）、 漱石の軸（芥川龍之介）

井伏鱒二は関東大震災当時、下戸塚の下宿屋に住んでいた。早稲田大学を中退し

注13 芥川龍之介（1978）「大震日録」『芥川龍之介全集第6巻』岩波書店 p.180

注14 芥川文（1975）『追想芥川龍之介』筑摩書房 p.166

た後のようだが、震災体験記からは緊迫感よりは、学生然としたどこかのんびりした雰囲気が伝わってくる。地震後3晩友人と早稲田大学のグラウンドから、東京の街が燃える様を眺めている。そして崩れかけた下宿から意を決して取り出した物は次の通り^(注15)。

私は…すこし無謀だと思ったが、毀れた階段を這って壁の崩れた自分の部屋に入って、カンカン帽と財布と歯楊枝と手拭を持って階下に降りて来た。危険を冒して屋内に入った割には、大したものを持ち出していない。この後もこのカンカン帽は大活躍で、「財布は帯に振込んで、カンカン帽に日和下駄をはき」郷里に帰ろうとする。下宿先から立川駅まで歩き始め、「薯畑に立込んでカンカン帽を枕に」野宿する。後日、これは従兄のカンカン帽だが、「電文用の用紙がなくて、従兄のカンカン帽の裏を剥がした紙片に、「マスジブジ」とだけ」書かれた電報が生家に届いている。鱒二にとってカンカン帽は、被って良し、枕にして良し、電報の用紙にも使える三拍子揃った便利なアイテムであったようだ。

一方、泉鏡花^(注16)の体験記も非常に個性の現れた興味深いものとなっている。震災の類焼で今にも自分の家が燃えそうな場面で、

此の火たとひ家を焚くとも、せめて清しき月出でよ…消すに水のない劫火は、月の雫が冷すのであらう。…

「ながれ星だ。」

「いや、火の粉だ。」

とあくまでロマンチック。そして、家からは次のものを持ち出している。

夢中で駈上つて、…観世音の塑像を一体、懐中し、…なき父が彫つてくれた、私の真鍮の迷子札を小さな硯の蓋にはめ込んで、大切にしたいのを、幸ひに拾つて、これを袂にした。

ここから、鏡花は公園に避難して野宿するのだが、この場面も艶っぽく、妖しげで完全に鏡花的世界である。まず公園に張った天幕の中で逢引が始まる。

「…泊つて行けよ、泊つて行けよ。」

「可厭よ、可厭よ、可厭よう。」

声を殺して、

「あれ、おほゝゝ。」

やがて接吻の音がした。

その後子供が急に目を覚まして見た先には、避難者の持ってきた荷物が妖しい様相を帯び始める。

私は膝について総毛立つた。

注15 井伏鱒二(1987)「関東大震災直後」『荻窪風土記』新潮社 pp.27-40

注16 泉鏡花(1942)「露宿」『鏡花全集巻27』岩波書店 pp.221-241

唯今、寝おびれた幼の、熟と視たものに目を遣ると、狼とも、虎とも、鬼とも、魔とも分らない、凄じい面が、ずらりと並んだ。…いづれも差置いた荷の恰好が異類異形の相を顕したのである。…其の手近なの、裂目の口を、私は余りのことに、手でふさいだ。ふさいでも、開く。開いて垂れると、舌を出したやうに見えて、風呂敷包が甘渋くニヤリと笑つた。

続いて、どの獣の面も皆笑つた。

これまで鏡花の小説は、鏡花の想像で編み出されたものだと考えていたが、むしろ、鏡花というフィルターを通して世界を見ると、どんな状況でも、たとえ大地震にあつて焼けだされている状況であっても、世界は鏡花の艶気と妖しさに満ちていたのだ。

さて、前章で妻に叱られた芥川龍之介^(注17)は避難に際し何を持ち出したのだろうか。

妻は児等の衣をバスケットに取め、僕は漱石先生の書一軸を風呂敷に包む。

このように、三者三様の物を持ち出していた。井伏鱒二と泉鏡花に関しては、数ある体験記の中でも、その作家のパーソナリティーが強く表われた、読み物としても面白いものであった。

3. 呑気な井伏鱒二、迷子の横光利一、心配性の菊池寛

前述の井伏鱒二の避難行は下宿を出た後、知らない人の家に泊めてもらい、商店で草履をめぐんでもらい、被災者無料の電車に乗って豆や、味噌汁、握飯、饅頭の接待を受けたりと、他の作家の体験記に比べて呑気な雰囲気のまま、郷里にたどり着く。そこで東京の友人からの手紙を受け取る。その手紙では、東京の「文学青年たちの間で話の種になりそうなゴシップが書いてあった。」^(注18)

『文藝春秋』を発行している菊池寛は、愛弟子横光利一の安否を気づかって、…『横光利一、無事であるか、無事なら出て来い』という意味のことを書いた旗を立てて歩いた。その菊池寛の後ろには、『文藝春秋』編輯同人の斎藤龍太郎、石浜金作などが従っていた。…文壇の元締菊池寛が血相変えて、横光ヤーイの幟を立て東京の焼け残りの街を歩く。今、我々は満目荒涼の焦土に対し、一片清涼の気が湧くの覚えて来る

横光利一は鱒二と早稲田の同級生で、すでに華々しくデビューを飾っていた。鱒二は「早く小説家または文士になりたくて」(p49) 同人雑誌に力を入れている時期であった。

この生まれた作家の初登場ほやほやの当人の安否を心配して、菊池さんが血ま

注17 芥川龍之介 (1978) 「大震日録」『芥川龍之介全集第6巻』岩波書店 p.181

注18 井伏鱒二 (1987) 「震災避難民」『荻窪風土記』新潮社 p.47

なこで幟を立てて焼け残りの町を歩いていく。菊池さんのことだから、布がだらんと垂れて字が読みにくい旗でなくて、正確にはっきりわかるように、長い布に乳をつけて竿に通した幟であったろう。(p52)

などと、菊池寛のきっちりした性格も踏まえて、その姿を想像している。

この幟を立てて尋ね人をする姿は、関東大震災では広く行われたようで、宮武外骨『震災画報』^(注19)にも挿絵付きで紹介されている。

(行方不明者)を尋ねる貼紙が…あらゆる個所にはられたが…この貼紙のほか「何町の何某様」と書いた木札または厚紙を棒に打付けて手に持ち、「神田多町の山口さんはおりませんか」とか…哀れな声で、避難者群衆の中を呼びながら歩いた者が数知れず

上野の西郷隆盛の銅像にも尋ね人の貼紙数百枚が貼られた図も添えられている。

探されていた横光自身はもちろん無事で「吾々を負かすものは地震ではない。それは功利から産れた文化である。我々の敵は国外にはない。恐る可き敵は本能寺に潜んでゐる。」^(注20)などと、雄々しく述べているが、幟を立てて探されていたと思うと、ほほえましい思いがする。

一方、探していた菊池寛は「文芸と云ふことが、生死存亡の境に於ては、…無用の贅沢品である…人生に於て何が一番必要であるかと云ふことが、今更ながら分つた。…食ふことと寝ることだ。」^(注21)と弱気な発言をして、里見弾などから批判を受けている。菊池は、横光だけでなく、久米正雄の生死も気にかけていたようで、仲間思いの親切な人物だったのかもしれない。^(注22)

が、東京の家の方では、…(久米正雄が)もう死んだものだと思ひ、一其の一番の悲観論者は菊池だつたさうだ。菊池は、かう云ふ際に私が死んでは、全集も出せないとまで心配し母の引取策まで考へて呉れたと云ふ。

このように菊池は、横光を幟を立てて捜し歩いたり、久米の母親の身の振り方を心配したり、なかなか忙しい災後を過ごしていたようだ。

4. 流言飛語

前項では、弱気な発言をしていた菊池寛だが、洪沢栄一などが唱えた「震災は腐敗した人間社会を懲らしめるための天罰だ」とする天譴論に対しては鋭い皮肉を放っている。^(注23)

もし、地震が洪沢栄一氏の云ふ如く天譴だと云ふのなら、やられてもいい人間

注19 宮武外骨 (2013)『震災画報』筑摩書房 p.21

注20 横道利一 (1982)「震災」『底本横道利一全集第13巻』河出書房新社 pp.50-51

注21 菊池寛 (2002)「災後雑感」『菊池寛全集補巻第2』武蔵野書房 pp.172-175

注22 久米正雄 (1930)「母を見るまで」『久米正雄全集第13巻』平凡社 p.260

注23 菊池寛 (2002)「災後雑感」『菊池寛全集補巻第2』武蔵野書房 p.175

が、いくらも生き延びてゐるではないか。渋沢さんなども、…自分の生き残つてゐることを考へて、天譴だなどゝは思へないだらう。

これには宮武外骨も喝采を送っている^(注24)。

虚業家渋沢栄一が天譴説を唱えたに対し、文士菊池寛が「天譴ならば栄一その人が生存するはずはない」と喝破したのは近來の痛快事であった。

関東大震災では、「地震のどさくさに紛れて朝鮮人が井戸に毒を投げ込む、爆弾を仕掛ける」あるいは「社会主義者が政府の転覆をたくらんでいる」といったデマが飛び交った。井伏鱒二^(注25)の体験記によれば、既に震災当日からそのような流言蜚語が流れていたようだ。菊池は、このデマに関しても良識を見せている。そのことを芥川が迂遠な言い回しで褒めている^(注26)。(言論統制のため、この時期の多くの文章と同様に、「不逞朝鮮人」などの言葉が伏字で○○となっている。)

僕は善良なる市民である。しかし僕の所見によれば、菊池寛はこの資格に乏しい。…菊池と雑談を交換してみた。…その内に僕は大火の原因は○○○○○○○○さうだと云つた。すると菊池は眉を挙げながら、「嘘だよ、君」と一喝した。…しかし次手にもう一度、何でも○○○○はボルシェヴィツキの手先ださうだと云つた。菊池は今度も眉を挙げると、「嘘さ、君、そんなことは」と叱りつけた。…

再び僕の所見によれば、善良なる市民と云ふものはボルシェヴィツキと○○○○との陰謀の存在を信ずるものである。もし萬一信じられぬ場合は、少くとも信じてゐるらしい顔つきを装はねばならぬものである。けれども野蛮なる菊池寛は信じもしなければ信じる真似もしない。これは完全に善良なる市民の資格を放棄したと見るべきである。善良なる市民たると同時に勇敢なる自警団の一員たる僕は菊池の為に惜まざるを得ない。

分かりづらい文章であるが、「善良なる市民」とはいい意味ではなく、デマに踊らされる無知蒙昧な民衆なのであろう。

芥川が言っているように、震災後には町々で不審者を警戒する自警団が作られた。刀や竹槍などを持ち出して、通る人を誰何し、訛りがあるなどで朝鮮人に間違われて怪我をさせられたり、実際に殺されてしまった人もいたらしい。そして、多くの朝鮮人と社会主義者が虐殺された。多くの文学者が、この出来事に対しての記述を残している。文学者の中でも、このデマに踊らされた者、批判的な者、様々な反応をしている。

注24 宮武外骨 (2013)『震災画報』筑摩書房 p.86

注25 井伏鱒二 (1987)『関東大震災直後』『荻窪風土記』新潮社 p.33

注26 芥川龍之介「大震雑記」『芥川龍之介全集第6巻』岩波書店 p.176

流言を言下に否定した菊池寛も自警団には参加していた^(注27)。

××を持つて、合言葉を使ふなどと云ふことは、大正の世にあるまじき事と思つてゐたが、震災後四五日の間は、私も××を手にして、合言葉を使つて、警戒に當つた。

菊池寛を評価した芥川龍之介自身は、震災の次の日に発熱をして寝込み、代わりに友人が徹夜で警備にあつた^(注28)。

夜に入りて発熱三十九度。時に○○○○○○○あり。僕は頭重うして立つ能はず。圓月堂、僕の代りに徹宵警戒の任に當る。脇差を横たへ、木刀を提げたる状、彼自身宛然たる○○○○なり。

近藤富枝^(注29)によれば、芥川の参加した田端の自警団は2ヵ月余りも続け、次第に親睦会のようになり、「龍之介は籐椅子をもち出してそこで寝そべり、…龍之介の話術にひきこまれて、夜警に出るのが楽しみになったくらいである。」と、それほど緊迫感のある夜警ではなかったようである。

小山内薫^(注30)によれば、永井荷風も夜警を楽しんだ一人であつたようだ。

荷風君は独棲の人である。

家は焼けもせず、潰れもしなかつたが、震災後は何処へ遊びに行くところもなく、話をする相手もなかつた。

そこで、楽しんで夜警に出た。夜警に出て、誰彼となく話した。

彼らとは対照的に久米正雄は、流言を信じて眠れぬ夜を過ごしている。久米は鎌倉で被災したが、震災の次の日にこの流言を聞いたようで、該当のページは半分近くが伏字になっている。その晩は「一挺の鉦をたよりに」警戒をした^(注31)。

広津和郎は、デマに批判的な態度を取つた一人であつた^(注32)。

あの震災に關聯して、今思い出しても日本人として堪らない気持ちのするのは、各地に起つた例の鮮人騒ぎである。…とにかく鮮人に対して、あの時日本人の行つたことは、これは何とも弁解のしようのない野蛮至極のものであつた。ああ云う場合、この国の人間には、野蛮人の血が流れているのではないかという気がする。…

(朝鮮人が来ますと言われて) 私は、

「そんな莫迦な話があるものか。鮮人が地震を予知していたわけではあるまいし、何処で勢揃いし、何処からやってくるというのだ。…そんなことは絶対に

注27 菊池寛 (2002) 「災後雑感」『菊池寛全集補巻第2』武蔵野書房 p.174

注28 芥川龍之介 (1978) 「大震日録」『芥川龍之介全集第6巻』岩波書店 p.181

注29 近藤富枝 (1983) 『田端文士村』中央公論新社 p.182

注30 小山内薫 (1923) 「道聴途説—荷風君の夜警」『女性10月特別号』プラトン社 p.87

注31 久米正雄 (1930) 「鎌倉震災日記」『久米正雄全集第13巻』平凡社 p.246

注32 広津和郎 (1998) 「葛西善蔵の「蠢く者」」『年月のあしおと下』講談社 pp.157-163

考えられないよ。僕はこれから寝るから、ほんとうに鮮人が来たら起こしてくれ。」…と云って、人々を安心させるために、畳の上にひっくり返ったら、実際に眠ってしまった。

翌日、葛西善藏のもとを訪ねるが、葛西が寺の管長が竹槍を持って守ったことを褒めたことに憤り、喧嘩別れをしてしまう。

寺田寅彦もこの流言をまるで信じなかったようだ^(注33)。

井戸に毒を入れるとか、爆弾を投げるとかささまざまな浮説が聞こえてくる。こんな場末の町へまでも荒らして歩くためには一体何千キロの毒薬、何万キロの爆弾が入るであろうか、そういう目の子勘定だけからでもじぶんにはその話は信ぜられなかった。

佐多稲子は体験記の中で庶民の「怜悯な判断」について次のように語っている^(注34)。

アラララ、と聞こえる高い叫び声は朝鮮語らしく聞こえる。竹刀でも激しく打ち合うような音も聞こえる。朝鮮人がこの大動乱に乗じて暴動を起こしたという筋骨を疑う力もないから、空地の周囲の叫び声や、打ち合うもの音を、朝鮮人との戦いなのだ、と私は思っていた。…

私はこのときのことをおもい出すたびに、同じ長屋で親しくしていたひとりのおかみさんの言った言葉を同時におもい出す。…長屋のものが半壊のわが家のまわりに寄り合ったとき、ひとりが自分のゆうべの恐ろしかった経験を話し出した。話し手の彼女は、一晩中朝鮮人に追いかけて逃げて歩いた、というのだ。それを聞いたとき、興行師のおかみさんは、利口にその話を訂正した。彼女はこう言ったのである。朝鮮人が暴動を起こしたなんていったって、ここは日本の土地なんだから、朝鮮人よりも日本人の数の方が多きにまっている。朝鮮人に追いかけられたとおもっていたのは、追われる朝鮮人のその前方にあんたがいたのだ。逃げて走る朝鮮人の前を、あんたは自分が追われるとおもって走っていたにすぎない、と。

私はこの訂正を聞いたとき、強いショックでうなずき、かねてのこの人への尊敬をいっそう強くした。…貧しい興行師のこの妻のような怜悯で正しい判断は、あの当時住民の多くは持ち得なかった。政府の流した蜚語は、大地震という自然の脅威におののいている住民の、異常な神経を煽った。

志賀直哉は震災時京都にいたようで、家族を心配して上京してくる。東京に向かう汽車の中で朝鮮人騒ぎの噂を聞く^(注35)。

注33 寺田寅彦(2011)「震災日記より」『天災と国防』講談社 pp.90-103

注34 佐多稲子(1979)「下町のひとびと」『佐多稲子全集第17巻』講談社 pp.349-354

注35 志賀直哉(1973)「震災見舞」『志賀直哉全集第3巻』岩波書店 pp.137-147

東京では朝鮮人が暴れ廻つてゐるといふやうな噂を聞く。が自分は信じなかつた。

松井田で、警官二三人に弥次馬十人余りで一人の朝鮮人を追ひかけるのを見た。

「殺した」直ぐ引返して来た一人が車窓の下でこんなにつたが、余りに簡単すぎた。今もそれは半信半疑だ。…

丁度自分の前で、自転車であつた若者と刺子を着た若者とが落ち合ひ、二人は友達らしく立話を始めた。…

「一鮮人が裏へ廻つたてんで、直ぐ日本刀を持つて追ひかけると、それが鮮人でねえんだ」…「然しかう云ふ時でもなけりやあ、人間は殺せねえと思つたから、到頭やつちやつたよ」二人は笑つてゐる。

志賀直哉が聞いたように、朝鮮人でないことを分かっているが言いがかりをつけられ、おそらく命を落とした事件も多くあつたようだ。江口渙も汽車の中で次のような出来事に出合う^(注36)。まず、車窓から川に流れていく「白い細長いもの」と、竹槍や鳶口を持って、川岸からその物体に石を投げつけている集団を見かける。車内では、その物体は「鮮人」か「主義者」の死骸であろうと噂する。その後、車内で足を踏んだの踏まないいで喧嘩が始まる。

喧嘩はしばらく続いていた。すると在郷軍人らしい方が、…突然座席へ突っ立ち上がった。

「諸君、こいつは鮮人だぞ。太い奴だ。こんな所へもぐり込んでやがって」…「おら鮮人だねえ。鮮人だねえ」

…時どき脅えきつたその男の声が聞こえた。しかも相手がおろおろすればするほど、みんなの疑いを増し興奮を烈しくするばかりだった。(その男は次の駅で引きずりおろされ) 物凄くほど鉄拳の雨を浴びた。

「おい。そんな事よせ。よせ日本人だ。日本人だ。」

私は思わず窓から首を出してこう叫んだ。側にいた二三の人もやはり同じようなことを怒鳴った。…こうして人の雪崩にもまれながら改札口の彼方にきえて行ったその日本人の後姿をいまだに忘れる事はできない。私には、一箇月ほどたった後に埼玉県下に於ける虐殺事件が公表された時、あの男も一緒に殺されたと思えなかつた。そして無防御の少数者を多数の武器と力で得々として虐殺した勇敢にして忠実なる「大和魂」に対して、否、それまでにしなければ承知の出来ないほど無条件に興奮したがる「大和魂」に対して、心からの侮蔑と憎悪とを感じないわけにいかかつた。ことに、その蒙昧と卑劣と無節制とに対して。

注 36 江口渙 (1972) 「車中の出来事」『江口渙自選作品集』新日本出版社 pp.287-291

小山内薫によれば山田耕作も同じような経験をしている^(注37)。

山田耕作君はハルビンで大震の報に接した。

急いで東京へ帰らうとして、先ず護身用のピストルを買った。それを何かに包んで、ルツクザツクの奥深く納めた。…

甲府を出てからのことであつた。

車中に興奮のあまり気の変になつた学生があつた。

学生の目には、車中の誰も彼もが〇〇に見えた。学生は車中の総ての人に荷物の検査を迫つた。

耕作君の袋の中にはピストルがある。…若し、それを見られたら、自分は殺されると思つた。

耕作君は終に立ち上がりて演説した。(荷物検査をするなら陸軍の出張所に行くように説得し、みんなの賛成を得る。)

耕作君はほつとした。

「実際、もうお終ひかと思つた」と、耕作君は幾度も言つた。

震災後の混乱期には朝鮮人の虐殺だけでなく、アナキストの大杉栄、伊藤野枝と大杉の甥が憲兵隊に殺された甘粕事件、社会主義者の川合義虎、平沢計七ら10名が、亀戸警察署に捕らえられ殺された亀戸事件が起きた。その事件に抗議して、大杉、伊藤の追悼記事や、プロレタリア雑誌『種蒔き雑記』^(注38)が組まれた。その中の「平沢君の靴」(無署名)^(注39)では、震災の2日後に平沢が連行され、その翌日、著者が荷車に石油と薪を積んでひいて行く巡査と出会った場面が描かれている。

「石油と薪を積んで何処へ行くのです。」

「殺した人間を焼きに行くのだよ。」…

「昨夜は人殺しで徹夜までさせられちゃった。三百二十人も殺した。外国人が亀戸管内に視察に来るので、今日急いで焼いてしまうのだよ。」

「皆鮮人ですか。」

「いや、中には七八人社会主義者もはいつているよ。」

そこで、著者はその死体のある場所を教えてもらい、そこへ向かう。

そこに二三百の鮮人、支那人らしい死骸が投げ出されていた。

自分は一眼見てその凄惨な有様に度肝をぬかれてしまった。自分の目はどす黒い血の色や、灰色の死人の顔を見て、一時にくらむような気がした。涙が出て仕方がなかった。…

注37 小山内薫(1923)「道聴途説—耕作君とピストル」『女性10月特別号』プラトン社 pp.86-87

注38 『種蒔き雑記』(1924) 種蒔き社

注39 (無署名)(2011)「平沢君の靴」『天変動く 大震災と作家たち』インパクト出版会 pp.130-133 今回本文の引用は『種蒔き雑記』でなくこちらの選書から採った

その時私はいつも平沢君のはいていた一足の靴が寂しそうに地上にころげているのを見た。

宮地嘉六^(注40)も同様に連行されたものの、留置所生活はどこかユーモラスだ。連行され取り調べもないまま監房に押し込まれ、食事は「小さなにぎりめし二個と梅干一個」のみである。

「全体どういふ理由で自分はこんな目に…あんまり幸福でありすぎたからだろうか…然し自分の生活はそれほど幸福ではなかつた筈である…」

同房の男は好きなもの一つ食べずに貯めこんだお金を火事場泥棒と間違えられて取り上げられてしまった。

「あ、口惜しい…。ほんとに好きなドラ焼き一つ喰はず辛抱したんだ。浅草から逃げて来る時も五銭の西瓜一切喰べるのをこらへて来たんだ。あ、口惜しい…」彼はわんわん泣き叫んだ。

そして、取り調べのないまま4日目を迎える。

四日目の昼めしには梅干の代りに蒟蒻一切を得た。その蒟蒻一切はまぐろの刺身のやうだつた。噫天意!!!

このように関東大震災に関連する様々な作品が残されており、生々しく震災やその後の情景を伝えている。非常事態に際した作家たちの反応は、文学作品を通して思い描くイメージとはまた違った作家の素顔を垣間見せている。

V. 震災関連文献リスト

震災文献リストは、3部に分かれている。第1部は、個人の全集などから採った作品。第2部は近年出された震災関係の選書や編年体大正文学全集などから採った作品。第3部は、震災直後に出された震災特集雑誌から採ったものとなっている。

(こだま・ちひろ 成蹊大学図書館司書／卒業生)

注40 宮地嘉六「蒟蒻の味」『宮地嘉六著作集第6巻』慶友社 pp.228-233

文献リスト1 個人の全集等

著者	短編タイトル	ページ数	図書タイトル	出版社	発行年月	地震	内容
野尻抱影	大震と星	11-	星三百六十五夜 秋	中央公論新社	2002.8	関東大震災	体験記
森茉莉	関東大震災	318-	記憶の繪	筑摩書房	1992.2	関東大震災	体験記
森茉莉	震災風景	321-	記憶の繪	筑摩書房	1992.2	関東大震災	体験記
与謝野晶子	瑠璃光	154-	新選と与謝野晶子歌集	講談社	2008.12	関東大震災	詩
柳田国男	二十五箇年後(豆手帖から)	123-	雪国の春: 柳田国男が歩いた東北	角川学芸出版	2011.11	明治29年三陸大津波	三陸の復興の様子
正岡容	大正東京錦絵	45-	東京恋慕帖	筑摩書房	2004.10	関東大震災等	震災川柳を掲載
寺田寅彦			天災と国防	講談社	2011.6	関東大震災	随筆
寺田寅彦			天災と日本人	角川学芸出版	2011.7	災害全般	随筆
中谷宇吉郎	天災は忘れた頃来る	270-	中谷宇吉郎随筆集	岩波書店	1988.9	災害全般	随筆
岡本綺堂	火に追われて	136-	岡本綺堂随筆集	岩波書店	2007.10	関東大震災	体験記
岡本綺堂	九月四日	175-	岡本綺堂随筆集	岩波書店	2007.11	関東大震災	体験記
吉村昭			三陸海岸大津波	文藝春秋	2004.3	3度の三陸津波	ルポ
水上瀧太郎	銀座復興	5-117	銀座復興	岩波書店	2012.3	関東大震災	小説
水上瀧太郎	九月一日	119-151	銀座復興	岩波書店	2012.3	関東大震災	小説
水上瀧太郎	遺産	185-216	銀座復興	岩波書店	2012.3	関東大震災	小説
鈴木三重吉	大震災火災記	227-	鈴木三重吉童話集	岩波書店	1996.11	関東大震災	ルポ
幸田文	大震災の周辺について	124-	幸田文全集 18	岩波書店	1996.5	関東大震災	体験記
幸田文	渋くれ顔のころ	131-	幸田文全集 18	岩波書店	1996.5	関東大震災	体験記
吉村昭			関東大震災	文藝春秋	2004.8	関東大震災	ルポ
谷崎潤一郎	日清戦争前後	117-	幼少時代	岩波書店	1998.4	地震	体験記
山本有三	その日から翌朝まで	38-	定本版山本有三全集第十巻	新潮社	1977.3	関東大震災	体験記
山本有三	地震と有一	42-	定本版山本有三全集第十巻	新潮社	1977.3	関東大震災	体験記
山本有三	大地	43-	定本版山本有三全集第十巻	新潮社	1977.3	関東大震災	体験記
井伏鱒二	関東大震災直後	28-	荻窪風土記	新潮社	1982.11	関東大震災	体験記
井伏鱒二	震災避難民	43-	荻窪風土記	新潮社	1982.11	関東大震災	体験記
芥川龍之介	大震雑記	173-178	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	体験記
芥川龍之介	大震日録	179-181	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	体験記
芥川龍之介	大震に際せる感想	182-184	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	評論
芥川龍之介	東京人	185-186	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	評論
芥川龍之介	廃都東京	187-188	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	評論
芥川龍之介	震災の文藝に与ふる影響	189-190	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	評論
芥川龍之介	古書の焼失を惜しむ	191-192	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	評論
芥川龍之介	鸚鵡	193-195	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	小説
芥川龍之介	妾問安答	196-199	芥川龍之介全集 6	岩波書店	1978.1	関東大震災	小説
芥川龍之介	ピアノ	195-	芥川龍之介全集 12	岩波書店	1996.10	関東大震災	小説
森まゆみ		324-	かしこ一葉: 「通俗書簡文」を読む	筑摩書房	1996.11	地震全般	地震見舞の文
堀切直人	関東大震災後	165-	寺田寅彦語録	論創社	2012.6	関東大震災	体験記
堀切直人	地震	193-	寺田寅彦語録	論創社	2012.6	関東大震災	体験記
小林雅司			寺田寅彦と地震予知	東京図書	2003.10	関東大震災	体験記
川端康成	大火見物	7-	川端康成全集 26	新潮社	1982.4	関東大震災	体験記
佐藤春夫	大震災見舞手紙の一つ	323-	佐藤春夫全集 11	講談社	1969.5	関東大震災	体験記
佐藤春夫	芥川龍之介のこと: 間抜けなこのない人	328-	佐藤春夫全集 11	講談社	1969.5	関東大震災	体験記
横光利一	震災	50-	定本横光利一全集 13	河出書房新社	1982.7	関東大震災	評論
泉鏡花	露宿	221-	鏡花全集第27巻	岩波書店	1942.10	関東大震災	体験記
泉鏡花	十六夜	241-	鏡花全集第27巻	岩波書店	1942.10	関東大震災	体験記
泉鏡花	間引菜	257-	鏡花全集第27巻	岩波書店	1942.10	関東大震災	体験記

永井荷風		237-	断腸亭日乗 1	岩波書店	2001.9	関東大震災	日記
清水幾太郎	大震災は私を変えた	175-	流言蜚語	筑摩書房	2011.6	関東大震災	体験記
会津八一	震余	141-	自註鹿鳴集	岩波書店	1998.2	関東大震災	体験を詩に
幸田露伴	震は享る	166-	露伴全集 30	岩波書店	1954.7	関東大震災	体験記
近藤富枝	関東大震災	177-	田端文士村	中央公論新社	2003.12	関東大震災	ルポ
宇野千代			生きて行く私	角川書店	1996.10	関東大震災	体験記
北原白秋	大震災抄	60-	白秋全集 9	岩波書店	1986.2	関東大震災	体験を詩に
川端康成	空に動く灯	107-	川端康成全集 2	新潮社	1999.10	関東大震災	小説
川端康成	浅草紅團	100-	川端康成全集 4	新潮社	1999.10	関東大震災	小説
久保田万太郎	火事息子	367-	久保田万太郎全集 4	中央公論社	1967.4	関東大震災	小説
田山花袋	地震の時	365-	定本花袋全集 23	臨川書店	1995.3	関東大震災	体験記
田山花袋	東京震災記	429-	田山花袋全集新輯別巻	文泉堂書店	1974.3	関東大震災	体験記
堀口大学	地震	681-	堀口大学全集 3	小澤書店	1982.4	関東大震災	体験を詩に
堀口大学	禍	166-	堀口大学全集 1	小澤書店	1982.1	関東大震災	体験を詩に
堀口大学	地震	497-	堀口大学全集 1	小澤書店	1982.1	関東大震災	体験を詩に
徳田秋声	不安のなかに	169-	秋声全集 6	臨川書店	1974.11	関東大震災	体験記
徳田秋声	余震の一夜	207-	秋声全集 6	臨川書店	1974.11	関東大震災	体験記
徳田秋声	「ファイヤガン」	227-	秋声全集 6	臨川書店	1974.11	関東大震災	体験記
秋田雨雀	自然の大脅威時代	87-	雨雀自伝	日本図書センター	1987.10	関東大震災	体験記
秋田雨雀	フェビヤン時代	105-	雨雀自伝	日本図書センター	1987.10	関東大震災	体験記
宮地嘉六	蒟蒻の味	228-	宮地嘉六著作集 6	開明堂	1985.2	関東大震災	小説
志賀直哉	震災見舞 (日記)	135-	志賀直哉全集 3	岩波書店	1973.9	関東大震災	体験記
江口渙	車中の出来事	287-	江口渙自選作品集 2	新日本出版	1972.10	関東大震災	体験記
江口渙	帰れる弟	292-	江口渙自選作品集 2	新日本出版	1972.10	関東大震災	体験記
谷崎潤一郎	「九月一日」前後のこと	196-	谷崎潤一郎全集 22	中央公論社	1968.8	関東大震災	体験記
宇野浩二	震災文章	7-	宇野浩二全集 12	中央公論社	1969.8	関東大震災	体験記
小泉八雲	生神様	209-	日本の心	講談社	1990.8	安政南海地震	小説
島崎藤村	地震	425-426	藤村全集 9	筑摩書房	1967.7	—	小説
島崎藤村	震災に於る日本人	522-524	藤村全集 16	筑摩書房	1967.11	美濃大地震	翻訳
島崎藤村	子に送る手紙	199-235	藤村全集 10	筑摩書房	1967.8	関東大震災	体験記、書簡体
室生犀星	地震きたる	133	室生犀星全集 1	新潮社	1964.3	—	詩
島崎藤村	関東大震災直後の書簡	316-	藤村全集 17	筑摩書房	1968.11	関東大震災	書簡
北原白秋	地震年	390-	白秋全集 29	岩波書店	1987.2	関東大震災	詩
北原白秋	震後	12-	白秋全集 38	岩波書店	1988.2	関東大震災	詩
與謝野晶子	大震後第一春の歌	7-	定本與謝野晶子全集 10	講談社	1980.12	関東大震災	詩
與謝野晶子	地震後一年	110-	定本與謝野晶子全集 10	講談社	1980.12	関東大震災	詩
與謝野晶子	大震後の生活	59-	定本與謝野晶子全集 19	講談社	1981.1	関東大震災	評論
宮本百合子	婦人と文学 7. ひろい飛沫	245-261	宮本百合子全集 17	新日本出版	2002.3	関東大震災	女性文学史
宮本百合子	大正十二年九月一日よりの東京・横浜間大震災火災についての記録	407-421	宮本百合子全集 20	新日本出版	2002.7	関東大震災	体験記、日記体
宮本百合子	一九二三年夏	421-435	宮本百合子全集 20	新日本出版	2002.7	関東大震災	体験記
芥川文		165-	追想芥川龍之介	筑摩書房	1975.2	関東大震災	体験記
戸川貞雄	震災異聞	314-	モダン都市文学 1 モダン東京案内	平凡社	1989.11	関東大震災	小説
高濱虚子	震災後の丸ビル	235-	定本高濱虚子全集 8	毎日新聞社	1974.4	関東大震災	体験記
高濱虚子	バラック建ての中央郵便局	254-	定本高濱虚子全集 8	毎日新聞社	1974.4	関東大震災	体験記
菊池寛	震災余譚	379-	菊池寛文学全集 1	文藝春秋	1960.11	関東大震災	体験記
萩原朔太郎	近日所感	136-	萩原朔太郎全集 3	筑摩書房	1977.5	関東大震災	詩
正宗白鳥	蠟燭の光にて	153-155	正宗白鳥全集 10	新潮社	1967.2	関東大震災	随筆

正宗白鳥	歳晩の感想	155-158	正宗白鳥全集 10	新潮社	1967.2	関東大震災	随筆
正宗白鳥	私と雑誌	158-160	正宗白鳥全集 10	新潮社	1967.2	関東大震災	随筆
正宗白鳥	あの夜の感想	170-173	正宗白鳥全集 10	新潮社	1967.2	関東大震災	随筆
正宗白鳥	大地は揺らぐ	173-174	正宗白鳥全集 10	新潮社	1967.2	関東大震災	随筆
正宗白鳥	大地震	273-277	正宗白鳥全集 17	福武書店	1983.7	—	戯曲
田山花袋	東京震災記	365-	定本花袋全集 25	臨川書店	1995.5	関東大震災	体験記
向田邦子	自信と地震	662-	向田邦子全集 1	文藝春秋	1987.6	地震全般	随筆
宮本外骨	震災画報	455-	宮本外骨著作集 3	河出書房新社	1988.8	関東大震災	ルポ
永井龍男			石版東京図絵	中央公論社	1978.5	関東大震災	随筆
永井龍男	大震災の中の一人	159-163	永井龍男全集 10	講談社	1982.1	関東大震災	体験記
菊池寛	震災後の思想界	170-	菊池寛全集補巻 2	武蔵野書房	2002.9	関東大震災	評論
菊池寛	火の子を浴びつゝ、神田橋一つ橋間を脱走す	171-	菊池寛全集補巻 2	武蔵野書房	2002.9	関東大震災	体験記
菊池寛	災後雑感	172-	菊池寛全集補巻 2	武蔵野書房	2002.9	関東大震災	随筆
菊池寛	災後雑感	175-	菊池寛全集補巻 2	武蔵野書房	2002.9	関東大震災	随筆
菊池寛	災後雑感	176-	菊池寛全集補巻 2	武蔵野書房	2002.9	関東大震災	随筆
菊池寛	落ちざるを恥づ	177-	菊池寛全集補巻 2	武蔵野書房	2002.9	関東大震災	評論
與謝野晶子	廢墟の美	58-59	與謝野晶子評論著作集 12	龍溪書舎	2001.5	関東大震災	評論
與謝野晶子	大震災第一春の歌	66-	與謝野晶子評論著作集 12	龍溪書舎	2001.5	関東大震災	詩
與謝野晶子	大震災後の生活	70-73	與謝野晶子評論著作集 12	龍溪書舎	2001.5	関東大震災	評論
坪内逍遙	大震災より得たる教訓	839-	逍遙選集 10	春陽堂	1927.1	関東大震災	体験記
佐多稲子	下町のひとびと	349-	佐多稲子全集 17	講談社	1979.4	関東大震災	小説
齋藤茂吉	日本大地震	796-	齋藤茂吉全集 5	岩波書店	1973.11	関東大震災	体験記
堀辰雄	麦藁帽子	239-	堀辰雄全集 1	筑摩書房	1977.5	関東大震災	小説
堀辰雄	顔	267-	堀辰雄全集 1	筑摩書房	1977.5	関東大震災	小説
高村光太郎	美の立場から (震災直後)	287-	高村光太郎全集 4	筑摩書房	1957.6	関東大震災	評論
折口信夫	砂けぶり	431-	折口信夫全集 22	中央公論社	1967.8	関東大震災	詩
内村鑑三	天災と天罰及び天恵	18-	内村鑑三全集 28	岩波書店	1983.2	関東大震災	評論
内村鑑三	The earthquake 地震に就いて	21-	内村鑑三全集 28	岩波書店	1983.2	関東大震災	評論
内村鑑三	災後余感	58-	内村鑑三全集 28	岩波書店	1983.2	関東大震災	体験記
内村鑑三	震はれざる国	60-	内村鑑三全集 28	岩波書店	1983.2	関東大震災	評論
内村鑑三	東京神田の焼跡に…	68-	内村鑑三全集 28	岩波書店	1983.2	関東大震災	体験記
内田魯庵	地震の教訓	233-	内田魯庵全集 8	ゆまに書房	1987.3	関東大震災	評論
内田魯庵	永遠に償はれない文化的大損失	239-	内田魯庵全集 8	ゆまに書房	1987.3	関東大震災	評論
内田魯庵	典籍の廢墟	280-	内田魯庵全集 8	ゆまに書房	1987.3	関東大震災	評論
内田魯庵	図書館の復興と文獻の保存	368-	内田魯庵全集 8	ゆまに書房	1987.3	関東大震災	評論
窪田空穂	鏡葉 関東大震災	429-	窪田空穂全集 7	角川書店	1965.10	関東大震災	詩
永井荷風	震災	253-	荷風全集 20	岩波書店	1994.10	関東大震災	詩
和辻哲郎	地異印象記	24-	和辻哲郎全集 23	岩波書店	1991.5	関東大震災	体験記
徳田秋聲	震災文章～心境断片	267-	秋聲全集 15	臨川書店	1974.11	関東大震災	体験記
大佛次郎	地震の話	148-149	大佛次郎随筆全集 1 水に書く	朝日新聞社	1973.12	関東大震災	随筆
久米正雄	地異人変記	228-240	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	鎌倉震災日記	241-248	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	震水火の只中に	249-255	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	母を見るまで	256-263	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	災害印象	264-271	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	追憶の東京	272-276	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	バラック・カッフエエ	277-282	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	体験記
久米正雄	際物	283-288	久米正雄全集 13	平凡社	1930	関東大震災	小説

島木赤彦	関東震災	489-	赤彦全集 1	岩波書店	1969.4	関東大震災	詩
島木赤彦	震災雑感	335-	赤彦全集 6	岩波書店	1969.10	関東大震災	随筆
若山牧水	震後の江山	184-	若山牧水全集 10	雄鶏社	1959.4	濃尾地震	ルポ
若山牧水	地震日記	257-	若山牧水全集 7	雄鶏社	1958.11	関東大震災	体験記
若山牧水	余震雑詠	342-	若山牧水全集 2	雄鶏社	1959.5	関東大震災	詩
大岡昇平	震災	492-	大岡昇平集 2 幼年、少年	岩波書店	1983.3	関東大震災	自伝
近松秋江	地震文学	166-	近松秋江全集 11	八木書店	1993.10	関東大震災	随筆
近松秋江	関西落ちを嗤ふ	167-	近松秋江全集 11	八木書店	1993.10	関東大震災	随筆
近松秋江	大震災一周年の回顧	247-	近松秋江全集 11	八木書店	1993.10	関東大震災	随筆
近松秋江	失はれた書	253-	近松秋江全集 11	八木書店	1993.10	関東大震災	随筆
近松秋江	忘れ難き九月一日～新 秋の香山より	257-	近松秋江全集 11	八木書店	1993.10	関東大震災	随筆
武者小路実篤	今後の文芸	21-	武者小路実篤全集 7	小学館	1988.12	関東大震災	随筆
武者小路実篤	六号雑記	654-	武者小路実篤全集 8	小学館	1989.2	関東大震災	随筆
楚人冠	濱口梧陵傳		楚人冠全集 7	日本評論社	1937.12	安政南海地震	小説
広津和郎	葛西善蔵の「蠢く者」	157-	年月のあしおと（下）	講談社	1998.5	関東大震災	随筆
徳富健次郎 (蘆花)	読者に	142-	みみずのたはこと（下）	岩波書店	1938.6	関東大震災	随筆
里見弴	妖雲	130-	安城家の兄弟（中）	岩波書店	1953.4	関東大震災	小説
葛西善蔵	一種の寂寞とした感じ	86-88	葛西善蔵全集 3	津軽書房	1974.12	関東大震災	随筆
葛西善蔵	敢て陳辯—菊池君に	89-90	葛西善蔵全集 3	津軽書房	1974.12	関東大震災	随筆
葛西善蔵	蠢く者	423-442	葛西善蔵全集 2	津軽書房	1975.3	関東大震災	私小説

文献リスト2 近年出された震災関係の選書、編年体大正文学全集

著者	短編タイトル	ページ数	地震	内容
インパクト選書5天変動く〜大震災と作家たち		インパクト出版会		2011.9
寺田寅彦	津浪と人間	7-13	明治29 三陸地震	評論
森鷗外	問答のうた	14	明治29 三陸地震	詩
大橋乙羽	火と水(抄)	15-19	明治29 三陸地震	体験記
山本才三郎	海嘯遭難実況談	20-31	明治29 三陸地震	体験記
田山花袋	一夜のうれい	32-34	明治29 三陸地震	随筆
小栗風葉	片男波	35-40	明治29 三陸地震	小説
山岸藪鶯	破靴	41-45	明治29 三陸地震	小説
柳川春葉	神の裁判	46-51	明治29 三陸地震	随筆
依田柳枝子	やまと健男	52-53	明治29 三陸地震	小説
佐佐木雪子	權の雫	54-59	明治29 三陸地震	小説
三宅花圃	電報	60-65	明治29 三陸地震	小説
齋藤緑雨	のこり物	66-68	明治29 三陸地震	評論
徳田秋聲	厄払い	69-71	明治29 三陸地震	小説
柳田國男	『遠野物語』より	72-74	明治29 三陸地震	小説
與謝野晶子	天変動く	77-78	関東大震災	詩
村上浪六	震災後の感想	79-84	関東大震災	随筆
近松秋江	天性に非ず天譴と思え	85-88	関東大震災	評論
室生犀星	日録	89-92	関東大震災	日記
久米正雄	鎌倉震災日記	93-101	関東大震災	日記
芥川龍之介	大震雑記	102-106	関東大震災	随筆
菊池寛	災後雑感	107	関東大震災	随筆
葉山嘉樹	牢獄の半日	108-122	関東大震災	体験記
布施辰治	その夜の刑務所訪問	123-129	関東大震災	体験記
[無署名]	平沢君の靴	130-133	関東大震災	体験記
宮武外骨	『震災画報』より	134-141	関東大震災	ルポ
野上彌生子	燃える過去	142-144	関東大震災	体験記
水守龜之介	不安と騒擾と影響と	145-148	関東大震災	体験記
藤沢清造	われ地獄路をめぐる	149-160	関東大震災	体験記
佐藤春夫	サーベル礼讃	161	関東大震災	随筆
細田民樹	運命の醜さ	162-168	関東大震災	体験記
永田幹彦	夜警	169-174	関東大震災	体験記
柳沢健	同胞と非同胞一二つの罹災実話から	145-180	関東大震災	評論
中西伊之助	朝鮮人のために弁ず	181-188	関東大震災	評論
廣津和郎	甘粕は複数か?	189-192	関東大震災	評論
山内封介	鮮人事件、大杉事件の露国に於ける輿論	193-196	関東大震災	評論
[無署名]	『種蒔く人 帝都震災号外』より	197-201	関東大震災	評論
夢野久作	一年後の東京	202-204	関東大震災	随筆

明治二十九年の大津波 原本の出版事項：『芸芸倶楽部海嘯義捐小説』号)		毎日新聞社 2011.1 (1896.7 臨時増刊号) (博文館)	
おとは生	絵とき	20-27	明治 29 三陸地震 口絵の説明
森鷗外	問答のうた	28	明治 29 三陸地震 詩
尾崎紅葉	藻くづ	29	明治 29 三陸地震 詩
饗庭篁村	たむけ	30	明治 29 三陸地震 詩
幸田露伴	竊護精舎随筆の一節	31	明治 29 三陸地震 随筆
坪内春のや	文学科卒業生を送るとて	32	明治 29 三陸地震 詩
依田學海	永仁鎌倉の天變	33-41	明治 29 三陸地震 小説
森田思軒	渉筆一則	42-43	明治 29 三陸地震 随筆
塚原澁柿園	五年のむかし	44-47	明治 29 三陸地震 小説
江見水蔭	磯白浪	48-65	明治 29 三陸地震 戯曲
石橋思案	車の上	66-78	明治 29 三陸地震 ルポ
小栗風葉	片男波	79-84	明治 29 三陸地震 小説
竹屋子爵夫人	軒端しのあやめ	85	明治 29 三陸地震 詩
小金井喜美子	高潮	86-88	明治 29 三陸地震 詩
三宅花園	電報	89-95	明治 29 三陸地震 小説
石樽青苔	電信	96-102	明治 29 三陸地震 小説
依田柳枝子	大和健男	103-104	明治 29 三陸地震 小説
中村田鶴子	忘れがたみ	105-108	明治 29 三陸地震 小説
田山花袋	一夜のうれひ	109-111	明治 29 三陸地震 随筆
宮崎湖處子	海嘯	112-114	明治 29 三陸地震 詩
ユーゴー・ 原抱一庵	『水、冥、』篇	115-119	明治 29 三陸地震 翻訳
三宅青軒	泡沫	120-124	明治 29 三陸地震 小説
柳川春葉	神の裁判	125-130	明治 29 三陸地震 随筆
堀内小倉	意外	131-135	明治 29 三陸地震 体験記
大澤天仙	退院患者	136-143	明治 29 三陸地震 小説
前田香雪	鰥寡孤獨	144-146	明治 29 三陸地震 小説
大槻如電	浄曲 八重垣	147-149	明治 29 三陸地震 小説
野口珂北	見三陸変災写真	150	明治 29 三陸地震 漢文
坪谷水哉	天に口なし	151-152	明治 29 三陸地震 随筆
巖谷小波	海嘯狂言鯨鯨	153-161	明治 29 三陸地震 戯曲
大橋乙羽	火と水	162-168	明治 29 三陸地震 随筆
	海嘯実説藻鹽草一惨話六十四種	169-185	明治 29 三陸地震 ルポ
松井拍劍	大侠	186-192	明治 29 三陸地震 ルポ
山本技手	海嘯遭難實況談	193-204	明治 29 三陸地震 ルポ
乙羽生	嘯害実況桑田碧海録	214-230	明治 29 三陸地震 ルポ

大正文学全集第 12 卷 1923		ゆまに書房	2002.10
鈴木三重吉	大震災火災記	441-452	関東大震災 ルポ
室生犀星	日録	534-536	関東大震災 日記
加納作次郎	震災日記	537-541	関東大震災 体験記
島崎藤村	飯倉だより (子に送る手紙)	542-553	関東大震災 手紙

菊池寛	災後雑感	554-557	関東大震災	随筆
広津和郎	非難と弁護(菊池寛に対する)	558-566	関東大震災	評論
西條八十	大東京を叩ふ	581-582	関東大震災	詩
西條八十	銀座哀唱	582-583	関東大震災	詩
生田春月	暗を行く電車	583	関東大震災	詩
竹久夢二	死都哀唱	583-585	関東大震災	詩
川路柳虹	施与	585	関東大震災	詩
川路柳虹	焦土	585	関東大震災	詩
野口雨情	焦土の帝都	586	関東大震災	詩
尾崎喜八	女等	586-587	関東大震災	詩
大関五郎	夢を見た男	587-588	関東大震災	詩
西條八十	Nihil	588	関東大震災	詩
佐藤清	人、火、地震	589	関東大震災	詩
千家元磨	青鬼と赤鬼(抄)	589-590	関東大震災	詩
萩原恭次郎	噴き上れ新事実の血	590	関東大震災	詩
深尾須磨子	忘れた秋	590	関東大震災	詩
堀口大學	禍	590	関東大震災	詩
堀口大學	人間よ	590-591	関東大震災	詩
與謝野晶子	天変動く	591	関東大震災	詩
佐佐木信綱	大震災劫火	592	関東大震災	詩
石樽千亦		592-593	関東大震災	詩
坪内逍遙		593	関東大震災	詩
九條武子		593	関東大震災	詩
五島美代子		593-594	関東大震災	詩
跡見花蹊		594	関東大震災	詩
四賀光子	禍の日	597	関東大震災	詩
河東碧梧桐	震災雑詠	613-614	関東大震災	詩

大正文学全集第 13 卷 1924		ゆまに書房	2003.1	
藤森成吉	逃れたる人々	11-53	関東大震災	小説
正宗白鳥	他人の災難	53-69	関東大震災	小説
長与善郎	或る社会主義者	70-85	関東大震災	小説
菊池寛	震災余譚(一幕)	86-96	関東大震災	戯曲
徳田秋聲	不安のなかに	97-112	関東大震災	小説
広津和郎	指	112-120	関東大震災	小説
志賀直哉	震災見舞	121-126	関東大震災	日記
田山花袋	焼跡	126-135	関東大震災	体験記
尾崎士郎	一事件	135-143	関東大震災	小説
一つの脳髓	小林秀雄	154-160	関東大震災	小説
水上瀧太郎	罹災者	160-179	関東大震災	小説
久米正雄	舞子	179-186	関東大震災	小説
佐野袈裟美	混乱の巷(一幕)	250-264	関東大震災	戯曲
葉山嘉樹	牢獄の半日	264-272	関東大震災	小説

宮崎一雨	炎の大帝都	284-294	関東大震災	小説
川路柳虹	前進すべき文藝—震災後文藝の一側面観	311-318	関東大震災	評論
千葉亀雄	戦争文藝と震後の文学	318-325	関東大震災	評論
佐藤春夫	都会的恐怖	326-327	関東大震災	評論
広津和郎	散文文藝の位置	349-353	関東大震災	評論
金子洋文	種蒔き雑記	353-365	関東大震災	体験記
戸川秋骨	他界の大杉君に送る書	365-369	関東大震災	手紙
千虎亘人・古川学人	甘粕公判廷に現れたる驚くべき謬論	370-375	関東大震災	評論
	無題録	372-375	関東大震災	評論
堺利彦	獄中を顧みつゝ	375-388	関東大震災	体験記
辻潤	ふもれすく	389-404	関東大震災	体験記
竹内大三位	集団バラックの生活記録—風紀、衛生、人道上の大問題として当局及び江湖諸彦に懇ふ	405-454	関東大震災	体験記
佐藤功一	都市美論	454-470	関東大震災	評論
生方敏郎	福太郎と幸兵衛との復興対話	470-487	関東大震災	戯曲
福永恭助	新帝都のスタイル	488-492	関東大震災	評論
柳田国男	市民の為に	492-494	関東大震災	評論
長田秀雄	大正十二年を送りて大正十三年を迎ふる辞	494-497	関東大震災	随筆
小山未明	思想と曙光に明けんとする大正十三年	497-499	関東大震災	随筆
田山花袋	新しい芽	499-500	関東大震災	随筆
上司小剣	自然に還れ	501-504	関東大震災	随筆
近松秋江	大正十二年を送りて新に大正十三年を迎ふるに当りて所感を誌す	504-506	関東大震災	随筆
本間久雄	反省と希望	506-508	関東大震災	随筆
近松秋江	大震災一周年の回顧	509-515	関東大震災	体験記
村松梢風	汽車の窓から東京を眺めて	515-519	関東大震災	随筆
田中貢太郎	写経供養	519-531	関東大震災	随筆
宮地嘉六	震災一年後の思出	532-534	関東大震災	体験記
上司小剣	ある夫人との対話	534-538	関東大震災	小説
長田秀雄	大震災回顧	538-541	関東大震災	体験記
萩原朔太郎	近日所感	550	関東大震災	詩
室生犀星	ふるさと	551	関東大震災	詩
堀口大學	震災詩集「災禍の上に」の扉に題す	553	関東大震災	詩
福田正夫	裸の嬰兒	554-555	関東大震災	詩
中西悟堂	私は蹠行く、私の都会を	555-556	関東大震災	詩
富岡誠	杉よ！眼の男よ！	562-565	関東大震災	詩
陀田堪助		569	関東大震災	詩
岡麓	短歌	571-572	関東大震災	詩
島木赤彦	短歌	572	関東大震災	詩
平福百穂	短歌	572-573	関東大震災	詩
藤沢古実	短歌	573	関東大震災	詩
高田浪吉	短歌	574-575	関東大震災	詩

築地藤子	短歌	575-577	関東大震災	詩
中村憲吉	桂離宮の歌	576-577	関東大震災	詩
土岐善麿	地上百首(抄)	577-578	関東大震災	詩
岡本かの子	桜(百三十九首)	578-581	関東大震災	詩
北原白秋	山荘の立秋	584-586	関東大震災	詩
窪田空穂	短歌	590-591	関東大震災	詩
與謝野晶子	病床にて	591-592	関東大震災	詩

大正文学全集別巻 大正文学年表・年鑑		ゆまに書房	2003.8	
田中総一郎	戯曲総勘定	417-422	関東大震災	回顧と展望
佐藤清	本年詩壇の一瞥	421-422	関東大震災	回顧と展望
青野季吉	創作界の一年	429-431	関東大震災	回顧と展望
本間久雄	文藝批評壇の回顧と要求	431-433	関東大震災	回顧と展望
武藤直治	反動期の文学を語る	433-438	関東大震災	回顧と展望
尾崎士郎	十二年論争私言	438-441	関東大震災	回顧と展望

コレクション・モダン都市文学 26 関東大震災		ゆまに書房	2007.6	
原本の出版事項：(噫東京)		(交蘭社)	(1923.11)	
西條八十	回顧	15-16	関東大震災	詩
西條八十	誰何	16-16	関東大震災	詩
西條八十	エプロンの儘で	17-19	関東大震災	体験記
西條八十	大東京を弔う	20-24	関東大震災	詩
西條八十	廻燈籠の唄	25-26	関東大震災	詩
西條八十	銀座哀唱	27-29	関東大震災	詩
西條八十	地震の後に	30-32	関東大震災	詩
生田春月	焼け跡の青い芽生え	35-45	関東大震災	体験記
生田春月	寂寥の秋	46-47	関東大震災	詩
生田春月	生き残ったもの	47-48	関東大震災	詩
生田春月	暗を行く電車	48-49	関東大震災	詩
生田春月	余震	50-50	関東大震災	詩
吉屋信子	滅びぬ夢	53-57	関東大震災	随筆
吉屋信子	悩める都の一隅にて	58-59	関東大震災	体験記
吉屋信子	悲しき露臺	60-62	関東大震災	詩
竹久夢二	死都哀唱	65-71	関東大震災	詩
落谷虹兒	転げある記	75-77	関東大震災	体験記
落谷虹兒	目隠し	78-84	関東大震災	詩
落谷虹兒	本所の雀	85-86	関東大震災	詩
落谷虹兒	傀儡師の唄	87-90	関東大震災	詩
水谷まさる	哀傷記	93-105	関東大震災	体験記
川路柳虹	施興	109-110	関東大震災	詩
川路柳虹	焦土	111-111	関東大震災	詩
川路柳虹	天呪	112-114	関東大震災	詩
川路柳虹	破壊	115-115	関東大震災	詩

川路柳虹	叫喚	116-117	関東大震災	詩
川路柳虹	余震	118-118	関東大震災	詩
下田惟直	かへらぬ少女	121-126	関東大震災	随筆
下田惟直	焼跡	127-128	関東大震災	詩
下田惟直	指折れば	129-130	関東大震災	詩
横山青娥	震災弔歌	133-138	関東大震災	詩
横山青娥	廃虚	139-140	関東大震災	詩
横山青娥	哀別の歌	141-142	関東大震災	詩
濱名東一郎	あ、彼の日	145-150	関東大震災	体験記
濱名東一郎	手向の花	151-152	関東大震災	詩
濱名東一郎	噫東京	153-154	関東大震災	詩
濱名東一郎	焼野原	155-157	関東大震災	詩
濱名東一郎	浅草寺にて	158-159	関東大震災	詩
濱名東一郎	女郎花	160-162	関東大震災	詩
濱名東一郎	初秋	163-165	関東大震災	詩
濱名東一郎	対岸の野辺より	166-170	関東大震災	詩
濱名東一郎	楽しき哀別	171-174	関東大震災	詩
野口雨情	焦土の帝都	177-179	関東大震災	詩
人見東明	瞬間の前後	183-192	関東大震災	体験記
人見東明	雨	193-194	関東大震災	詩
人見東明	子供ごころ	195-196	関東大震災	詩
人見東明	その夕	197-199	関東大震災	詩
(震災詩集 災禍の上に) (新潮社) (1923.11)				
PAUL CLAUDEL	LA NUIT 1er SEPTEMBER 1923 ENTRE TOKYO ET YOKOHAMA	221-222	関東大震災	詩
秋田雨雀	死の都	223-225	関東大震災	詩
赤松月船	仕合せな人達	226-227	関東大震災	詩
赤松月船	私の街路樹	227-228	関東大震災	詩
青手慧	地震	229-230	関東大震災	詩
青手慧	死	230-232	関東大震災	詩
青手慧	愛着	232-234	関東大震災	詩
生田春月	恐ろしき悪夢の後	235-244	関東大震災	詩
伊福部隆輝	不安な一夜	245-247	関東大震災	詩
伊福部隆輝	涙	247-249	関東大震災	詩
尾崎喜八	東京へ	250-252	関東大震災	詩
尾崎喜八	女等	252-253	関東大震災	詩
大關五郎	夢を見た男	254-258	関東大震災	詩
川路柳虹	東京よ、起き上れ、不死鳥のやうに	259-262	関東大震災	詩
川路柳虹	死者への禮	262-265	関東大震災	詩
川路柳虹	震後	265-268	関東大震災	詩
川路柳虹	残骸の東京	268-271	関東大震災	詩
河井醉茗	大地よ鎮まれ	272-274	関東大震災	詩
河井醉茗	砂上の秒音	274-277	関東大震災	詩

河井醉茗	流木	277-278	関東大震災	詩
喜志麥雨	昨日の炎	279-281	関東大震災	詩
兒玉花外	焼かるゝ心	282-283	関東大震災	詩
西條八十	畏怖の時	284-286	関東大震災	詩
西條八十	Nihil	287-288	関東大震災	詩
佐藤清	予感	289-290	関東大震災	詩
佐藤清	獅子	290-292	関東大震災	詩
佐藤清	人、火、地震	292-294	関東大震災	詩
佐藤清	地震雲と月	294-296	関東大震災	詩
佐藤惣之助	解放されたる狼	297-298	関東大震災	詩
佐藤惣之助	死霊の電車	298-299	関東大震災	詩
佐藤惣之助	天国めいた地獄	299-300	関東大震災	詩
澤ゆき子	九月一日の夜の小屋から	301-304	関東大震災	詩
白鳥省吾	寂しい満月	305-308	関東大震災	詩
白鳥省吾	灰燼の中から	308-309	関東大震災	詩
白鳥省吾	初秋の庭	310-312	関東大震災	詩
鈴木信治	田舎に在りて	313-317	関東大震災	詩
陶山篤太郎	墳墓	318-319	関東大震災	詩
陶山篤太郎	バラックの月	319-320	関東大震災	詩
陶山篤太郎	愛戀	320-321	関東大震災	詩
千家元麿	凄い夜半の月がのぼった	322-324	関東大震災	詩
千家元麿	死の電車	325-325	関東大震災	詩
千家元麿	青鬼と赤鬼	325-330	関東大震災	詩
大藤治郎	焼跡へ帰る	331-334	関東大震災	詩
多田不二	焦土に立つ	335-338	関東大震災	詩
角田竹夫	都市哀歌	339-341	関東大震災	詩
富田碎花	残された影	342-344	関東大震災	詩
長澤三郎	吾が聞くは	345-347	関東大震災	詩
中田信子	隣人の愛	348-349	関東大震災	詩
中田信子	秋風	349-351	関東大震災	詩
中西悟堂	虐殺されし首都	352-358	関東大震災	詩
中山啓	新鮮な首都	359-365	関東大震災	詩
萩原恭次郎	無題	366-368	関東大震災	詩
萩原恭次郎	噴き上がり新事実の血	368-370	関東大震災	詩
橋爪健	人類鑿滅	371-378	関東大震災	詩
林真一	怖ろしき廃墟	379-381	関東大震災	詩
林真一	死滅	381-383	関東大震災	詩
日夏耿之助	尸解	384-386	関東大震災	詩
深尾須磨子	博士のゆくへ	387-389	関東大震災	詩
深尾須磨子	忘れた秋	389-390	関東大震災	詩
福田正夫	足音	391-393	関東大震災	詩
福田正夫	法師蟬	393-394	関東大震災	詩
藤森秀夫	バラック讃賞	395-396	関東大震災	詩

堀口大學	禍	397-397	関東大震災	詩
堀口大學	人間よ	397-398	関東大震災	詩
正富汪洋	死都	399-401	関東大震災	詩
正富汪洋	門柱に凭れて	401-402	関東大震災	詩
正富汪洋	小曲二篇	403-404	関東大震災	詩
松原至大	人間を結ぶ	405-409	関東大震災	詩
松本淳三	美しい花	410-412	関東大震災	詩
松本淳三	蜻蛉	412-413	関東大震災	詩
前田春聲	廢墟東京に寄す	414-417	関東大震災	詩
三木露風	震災詩前曲 ノエの洪水	418-422	関東大震災	詩
三木露風	流浪の子	422-424	関東大震災	詩
三木露風	悪の竈	424-425	関東大震災	詩
三木露風	哀歌	425-427	関東大震災	詩
三木露風	帝都の惨害を歌ふ詩	427-430	関東大震災	詩
南江二郎	不朽なるもの	431-435	関東大震災	詩
武者小路實篤	用意はいゝか	436-441	関東大震災	詩
村松正俊	思ひ	442-443	関東大震災	詩
百田宗治	蟋蟀	444-444	関東大震災	詩
百田宗治	霧	445-445	関東大震災	詩
百田宗治	小田原にて	445-446	関東大震災	詩
山口宇多子	淋しい秋	447-449	関東大震災	詩
米澤順子	その夜	450-451	関東大震災	詩
米澤順子	空し	452-453	関東大震災	詩
宵島俊吉	東京のために	454-455	関東大震災	詩
宵島俊吉	バラック街で	455-458	関東大震災	詩
井上康文	滅亡の首都・郷土	459-463	関東大震災	詩
(震災畫譜 畫家の眼) (黎明社) (1923.12)				
堂本印象	京都より	486-487	関東大震災	手紙
鶴田吾郎	線と面と重量感	488-489	関東大震災	隨筆
鶴田吾郎	焦土に立つ人	490-491	関東大震災	隨筆
曾宮一念	落日の街—銀座附近にて	492-493	関東大震災	挿絵
岡本一平	隅田川を筆筒に擱まって	494-495	関東大震災	隨筆
服部亮英	九月二日の記	496-498	関東大震災	体験記
在田稠	復興よ速かなれ	499-501	関東大震災	詩
平福百穂	湯島聖堂跡	502-503	関東大震災	隨筆
山村耕花	胎兒	504-505	関東大震災	詩
山村耕花	木の骸	506-507	関東大震災	詩
細木原青起	考へ事	508-509	関東大震災	体験記
森島直三	己の手	510-512	関東大震災	体験記
小川治平	お灸と地震	513-515	関東大震災	体験記
林重義	吉原の焼跡	516-517	関東大震災	体験記
八幡白帆	貴重なる體驗	518-519	関東大震災	体験記
奥村林曉	震災句	520-521	関東大震災	詩

森田恒友	収容所附近	522-523	関東大震災	挿絵
小寺健吉	清水堂のえんの下	524-525	関東大震災	随筆
小寺健吉	駿河臺	526-527	関東大震災	随筆
伊東深水	日比谷所見	528-529	関東大震災	随筆
柚木久太	寸感	530-531	関東大震災	随筆
岩田専太郎	焼跡にて	532-533	関東大震災	随筆
相田直彦	築地にて	534-535	関東大震災	随筆
水島爾保布	救助者!	536-537	関東大震災	挿絵
清水對岳坊	菊を眺める人	538-539	関東大震災	挿絵
宍戸左行	皮一枚の深さ	540-541	関東大震災	随筆
中西立頃	地震成金	542-543	関東大震災	随筆
竹久夢二	不死鳥	544-545	関東大震災	随筆
竹久夢二	お茶の水にて	546-547	関東大震災	挿絵
吉田秋光	火の海	548-549	関東大震災	体験記
吉田秋光	野にかへる	550-551	関東大震災	随筆
平澤大暲	寸感	552-553	関東大震災	随筆
池部鈞	ビール瓶よ	554-556	関東大震災	体験記
下川凹天	逃げる人々	557-559	関東大震災	体験記
代田收一	大地震の産物	560-561	関東大震災	随筆
森火山	木場の橋を渡る	562-563	関東大震災	体験記
川端龍子	一枚の莫塵	564-565	関東大震災	体験記
丸山晚霞	怪雲	566-567	関東大震災	体験記
望月省三	のこんの家(神田にて)	568-569	関東大震災	挿絵
望月省三	廢墟(築地にて)	570-571	関東大震災	挿絵
清水三重三	市村座の焼跡	572-573	関東大震災	挿絵
清水三重三	こしらへ心配	574-576	関東大震災	体験記
宮尾しげな	湯島天神	577-579	関東大震災	詩
幸内純一	震災を讚美する	580-581	関東大震災	随筆
前川千帆	半僧坊様の復興	582-583	関東大震災	随筆
長谷川昇	震災の生産物	584-585	関東大震災	挿絵
長谷川昇	唯一の交通機關	586-587	関東大震災	挿絵
荻野健兒	銀座教會にて	588-589	関東大震災	手紙
關晴風	一笑話	590-591	関東大震災	体験記
關晴風	災残のニコライ堂	592-593	関東大震災	随筆
新關健之助	野天風呂	594-595	関東大震災	随筆
新關健之助	線路上の夜營	596-597	関東大震災	随筆
小室孝雄	破壊の半面	598-599	関東大震災	随筆
近藤浩一路	震災日記の一節	600-603	関東大震災	体験記

震災記念十一 時五十八分	萬朝報社出版部	1924.9	関東大震災	体験記、美談など
種時き雑記	種時き社	1924.1	関東大震災	亀戸事件を抗議

文献リスト3 震災直後に出された震災特集雑誌

著者	タイトル	ページ数	内容
女性改造 2 (10) 大震災記念号 1923.10			
北吟吉	再建に於ける女性の分け前	1-12	評論
堀江歸一	経済社会はどうなるか	13-18	評論
	震災と諸家の印象	19-27	作家が震災時何をしていたか
石原純	地震に関する対話	28-33	対談風
今村明恒	今後大地震が来るか	34	評論
中村左衛門 太郎	今後の地震に対する心得	35-36	評論
岩村義延	焼跡に肉親の遺骨を捜す	37-40	体験記
森まさ子	臨月の妻を助けて九死に一生を得た話	40-42	ルポ
葉山一郎	母を見殺しにした小田原の一夜	42-45	体験記
野村ちあき	職責を全うした七十の爺さん	45-46	ルポ
原田仙	血涙記	46-50	ルポ
藤沢清造	焦熱地獄を巡る	51-68	体験記
澁谷のぶ	罹災者の情況と婦人團體の活動など	69-75	体験記
柴山武矩	湘南震災地踏破記	76-83	体験記
宮城久輝	吾妻橋の火を逃れて上野へ	84-87	体験記
濱本浩	被服廠跡遭難實話	88-91	ルポ
竹久夢二	荒都記	92-96	体験記
	震災日誌	97-100	日誌
室伏高信	時評	101-104	評論
武者小路實篤	このさいの希望	105-109	評論
平塚明	震災雑記	110-113	体験記
鷹野つぎ	天災の價值	114-117	評論
深尾須磨子	博士のゆくへ	118-119	詩
坂本眞琴	火嵐に追はれて	120-122	体験記
與謝野晶子	災後	123	詩
吉田絃二郎	震災雑感	124-125	体験記

女性改造 2 (11) 新東京号 1923.11			
柳宗悦	死とその悲みに就て	1-6	評論
千葉龜雄	國民性上の二疑問	7-15	評論
帆足理一郎	生と死の問題	16-23	評論
高須芳次郎	新東京の黎明色	28-36	隨筆
白鳥省吾	焦土復興と殘街繁晶	37-45	隨筆
網野菊	私のスケッチ	46-48	隨筆
三宅やす子	新東京記	49-51	隨筆
近松秋江	涙の溢れる東京	51-53	隨筆
竹久夢二	帝都復興畫譜	54-61	隨筆
高群逸枝	新東洋主義へ	76-79	評論

藤田咲子	実際的に見た私の要求	79-83	評論
加藤愛子	凶災より復興へ	84-86	評論
杉浦翠子	慟哭の歌	88-89	詩
阿部しづ	劔のかけに	90-92	ルポ
長島喜代子	火の粉の中で水盃をして	93-96	ルポ
川口たり子	悲しい横濱關内の話	96-98	体験記
栗島浪江	愛兒を奪はれ憎悪より感泣へ	98-100	随筆
村岡巴	呪はしき良人の死	101-104	体験記
菊池寛	厨川白村氏の思ひ出	105-106	体験記
厨川蝶子	哀しみの追憶より	107-113	体験記
平塚明子	震災雑感	114-122	体験記
澤田正二郎	難に克つ	123-132	体験記
佐賀ふさ	衣服の改善と諸種の實例	136-143	復興のための生活改善記事
手塚かね子	食物の献立は科學的に考案したい	144-149	復興のための生活改善記事
木村恒	婦人の三大敵	150-153	復興のための生活改善記事
野上彌生子	野枝さんのこと	154-159	随筆
大杉栄、 伊藤野枝	七年前の戀の往復	160-165	書簡
橘あやめ	憶ひすまゝ	166-169	随筆
賀川豊彦	鳳凰は灰燼より甦る	170-180	評論
伊藤野枝	或る男の墮落	2-20	甘粕事件で殺された伊藤の遺稿
加能作次郎	下町娘の日記	21-35	小説
河井醉茗	餘震時々の手記	71-81	体験記
岡本かの子	逃れ來りて	82-83	詩

女性改造 3 (1) 新年号 1924.1			
土岐善麿	避難生活の中に	133-138	体験記
鹿島英二	流行の新傾向は復興色と復興柄	169-172	ファッション記事

女性 9 (10) 十月震災特別号 1923.10			
輿謝野晶子	短歌五首	1	詩
吉田絃二郎	老母をたずねて焦跡をさまよふ	2-3	体験記
菊池寛	火の子を浴びつゝ、神田橋一つ橋間を脱走す	4	体験記
吉江喬松	震災記	5-9	体験記
中村吉藏	淺草公園を脱出して	10-11	体験記
芥川龍之介	大震前後	11-13	体験記
山本有三	地震と有一	14-15	体験記
加能作次郎	不安、恐怖	15-17	体験記
室生犀星	小言	17-18	体験記
佐藤春夫	勇敢なる人	19	随筆

里見淳	二つの型を通じて	19-21	随筆
柴田勝衛	大震災時言	21-23	評論
久米正雄	鎌倉震災記	23-34	体験記
廣津和郎	東京から鎌倉まで	34-47	体験記
泉鏡花	露宿	47-59	体験記
長田幹彦	廢墟に立ちて	60-67	体験記
岡榮一郎	火に追はれて逃げる	68-77	体験記
木村荘太	震災罹災記	77-84	体験記
小山内薫	道德途説	85-89	随筆
中原綾子	これを見よ	90-93	詩
野上俊夫	非常時に際して	2-8	評論
土田杏村	運命觀より新社会連帯へ	9-12	評論
田邊朔郎	九死に一生を得て後の感想	13-17	体験記
梅原真隆	遭難雜感	18-21	体験記
笠原道夫	災害と小兒の保健	22-25	評論
加藤直士	関東震災から得た経験と感想	26-35	体験記

女性 9 (11) 十一月号 1923.11			
三宅雪嶺	帝都の復興について	44-49	評論
杉森孝次郎	眞理に機會を興へる變時の威力	50-53	評論
土田杏村	天災の地理的環境と文明の歸趨	65-82	評論
高野六郎	生き延びた生命を粗略に扱ふな一震災後の衛生と婦徳問題	83-89	評論
權田保之助	非常時に現はれた娛樂の種々相	90-96	体験記
大谷句佛	秋蟬	97-107	体験記
九條武子	炎の歡呼	108-109	詩
河竹繁俊	本所を脱出して	110-118	体験記
厨川蝶子	悲しき追憶	119-138	体験記
千葉龜雄	中産階級の失業者其他	139-147	評論
平塚明	都市経営に繋る女性の分け前	148-151	評論
三宅やす子	暴露された都會生活者の缺點	151-154	評論
井上秀子	宗教的に光りある生活を求む	155-156	評論
山田わか	有閑階級婦人の猛省を促す	157-162	評論
永井荷風	快活なる運河の都とせよ	164-165	復興に対する要求
丸山幹治	豫定圖は金が掛からない	165-166	復興に対する要求
岡上りう	新町名には東西名士の名を	166-167	復興に対する要求
高村智恵	建設の根源は此處に在り	167-168	復興に対する要求
志賀重昂	世界的の商都と防禦都とに	169	復興に対する要求
塚本靖	市區改正を理想的に行へ	169	復興に対する要求
若宮卯之助	西洋流の都市計畫には大反對	169-170	復興に対する要求
馬場恒吾	放射線道路は實用に適さぬ	170	復興に対する要求
下田將美	新生の大東京を建つべく	170-171	復興に対する要求
高村光太郎	アメリカ趣味の流入を防げ	171	復興に対する要求

與謝野晶子	明治神宮あたりを中心に	171	復興に対する要求
早川鉄治	地震國の學者を招徠して	172	復興に対する要求
関野貞	間に合せ主義はこの際禁物	172	復興に対する要求
笹川臨風	市民の復舊は先決問題	172-173	復興に対する要求
山川菊榮	人口を広い面積に撒布さすこと	173	復興に対する要求
山田わか	性的の自警自治を促す	173	復興に対する要求
巖谷小波	中央集權の弊を矯めたい	173-174	復興に対する要求
市川源三	學校にはプールを附設すること	174	復興に対する要求
坪谷善四郎	無公園の實物教育に鑑みて	174-175	復興に対する要求
伊東忠太	災害の因をなした二要素	175	復興に対する要求
下村宏	隨所に大競技場を設けよ	175-176	復興に対する要求
下田歌子	恥かしい職業を廢したい	176	復興に対する要求
岡田信一郎	燃えない都と其の下玄關	176-177	復興に対する要求
川尻東馬	可能性ある範圍で實行	177	復興に対する要求
佐藤功一	大地に理想的のラインを引け	177-178	復興に対する要求
山本鼎	形態と色彩の調和に注意せよ	178	復興に対する要求
宮田修	公共施設の分布を系統的に	178	復興に対する要求
川田順	大地震後のある夜	179-181	体験記
原阿佐諸	保田で拾つた生命	182-186	体験記
中條百合子	私の覚え書	186-194	体験記
大谷光瑞	震災所感	195-197	評論
厨川白村	斷片語 (遺稿) 一倒壊せし白日村舎の壁土の底に見出でたるノートの端より	198-199	隨筆
谷崎潤一郎	港の人々	212-225	体験記

思想 第25号 1923.11			
須田皖次	相模灘大地震の真相	01-24	論文
日下部四郎太	大地震豫報之可能性	25-34	論文
中村清二	大地震による火災	35-41	論文
中村左衛門 太郎	大地震の慘害を見ての感想	42-52	論文
岡田武松	震災雑談	53-57	論文
佐野利器	地震と建築	58-63	論文
藤原咲平	地震と火災	64-80	論文
佐藤功一	民族性と住宅觀	81-87	論文
内藤多仲	建築物と震火災	88-97	論文
今村明恒	東京市街地に於ける震度の分布	98-124	論文
長岡半太郎	大震雜感 (前)	125-132	体験記
三宅雪嶺	震災關係の心理的現象	133-139	評論
安倍能成	震災と都會文化	139-152	評論
野上豊一郎	九月一日	153-169	体験記
茅野蕭々	認識による征服 (斷想三章)	170-176	評論
速水湜	流言蜚語の心理	176-183	評論

和辻哲郎	地異印象記	183-204	体験記
篠田英	一つの経験	205-212	体験記

思想 第26号 1923.12			
安倍能成	或る禪坊の焼失	96-103	体験記

アララギ 16 (10) (震災報告号) 1923.10			
島木赤彦	震災報告	1-2	報告
島木赤彦	目に見るもの	3-5	体験記
西田幾多郎	大震災の後に	02-03	評論
安倍能成	九月一日の心覚え	03-06	体験記
平福百穂	震災記	06-08	体験記
森田恒友	災後一ヶ月	08	随筆
岡麓	震災記	08-13	体験記
河西省吾	震災雑記	13-15	体験記
結城哀草果	震災雑感	15-16	随筆
島木赤彦	震災雑感	16-18	随筆
高田浪吉	九月一日	18-22	体験記
廣野三郎	震災雑感	22-24	体験記
竹尾忠吉	震災雑記	24-29	体験記
辻村直	地震雑記	29-31	体験記
森山汀川	震災感	31	体験記
藤森青二	震災上京記	31-32	体験記
藤澤古實	地震の時	33-36	体験記

アララギ 16 (12) (第二震災号) 1923.11			
中村憲吉	震災追想四篇	2-16	随筆
加納暁	震災雑録	16-19	体験記
今井邦子	震災の日	19-22	体験記
築地藤子	震災書信	22-23	体験記
齋藤義直	焼原雑感	23-25	体験記
小杉茂	宮城前の一夜	25-29	体験記
武田祐吉	萬葉集三本の喪失	25-29	震災で焼けた本
高田浪吉	災害の後に	99-100	体験記
	二月集 (震災歌)	2-36	詩